

フランス・アルザスにおけるアルザス語の位置付け
—ストラスブールの言語景観と聞き取り調査からの考察—

杉浦 黎 (東京大学大学院)

本研究はフランスの境界地域アルザスのストラスブールにおける言語状況を観察することにより、「グローバル化」という現象が進む現代社会における地域語の新たな道を導き出すことを目的とする。そして、フランスとドイツの間に位置してきた境界地域アルザスにおける地域語アルザス語がどのように公共空間の中で用いられ、人々によって認識されているのかを足がかりとして、アルザス語の新たな存続の方向性を模索する。

本研究で対象とするアルザス地域の地域語アルザス語はアルザスという土地の辿ってきた歴史を反映し、複雑な環境に置かれてきた。特に、第二次世界大戦中のナチスによるアルザス占領の歴史によりアルザス語が「敵国」の言語という否定的なイメージを付与された。20 世紀後半、国際連合教育科学文化機関による少数言語消滅への指摘にも後押しされ、欧州連合と欧州評議会は社会における多言語主義と個人における複言語主義を目指した政策を打ち出してきた。だが、アルザス語は話者の高齢化と言語継承の難しさに直面している。本研究ではこのようなアルザス語の実態を捉えるために、どのようにアルザス語が公共空間の中で使用され、人々によって認識されているかを明らかにするために、1)ストラスブール中心街での言語景観調査 (Landry&Bourhis, 1997)、2)非公式インタビューの二つの手法を用いて調査を実施した。

ストラスブールの公共空間において、地域語であるアルザス語は通り名の表記においてフランス語と併記されており、地域を象徴する言語として現れる。非公式インタビューでは、人々のアルザス語への態度や認識における差異を観察することができた。アルザス語を下位言語としての「パトワ」であると明言する人がいる一方で、アルザス語はアルザスの文化や生活、伝統の核を為しているのだと訴える人もいた。

アルザス語はドイツ時代との複雑な関係を今なお持ち続けており、アルザス語を歴史や伝統的なエスニシティの文脈で使用を促すことはアルザスの人たちにとっての否定的な歴史を思い起こすことを指す。このように捉えられてきた地域言語を異なる側面から捉える概念として、「メトロエスニシティ」、「メトロランゲージ」という新たな形態のエスニシティと言語への捉え方が提案されている (Maher, 2005)。これは伝統的なエスニシティとは異なる、より「ライト」なエスニシティであり、独立主義などにつながる「ハード」な性質を持つものではなく、人々が「装飾品」のように身につけたり取り外したりできる流動的な自己認識の一つのあり方である。本研究はアルザスにおけるアルザス語の公共空間での使用、人々の認識を一つの例として「メトロエスニシティ」(Maher, 2005) という概念を用いた地域言語の存続を提案する。

要旨での引用文献

- Landry, R. & Bourhis, R. Y. (1997). Linguistic landscape and ethnolinguistic vitality: An empirical study. *Journal of Language and Social Psychology*, 6, pp. 23-49.
- Maher, J. C. (2005). Metroethnicity, language, and the principle of Cool. *International Journal of The Sociology of Language*, pp. 83-102.